

事後評価報告書(日-南アフリカ研究交流)

1. 研究課題名:「赤痢アメーバ症の新規診断・制御法の開発を目的とした病原・発症機構の
解明」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:国立大学法人筑波大学生命環境系 教授 野崎 智義

2-2. 相手側研究代表者:ヴェンダ大学数学・自然科学部 上級講師 Samie Amidou

3. 総合評価: (A)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

赤痢アメーバの遺伝子型判定を行うことにより、臨床で応用可能な新規診断マーカーの候補が創出され、病気の悪性度等と相関する病原体側の遺伝子マーカーが明らかになり、さらに遺伝子AIG1-17がフィロポディア形成と細胞接着に関与していることが明らかとなり病原機構の一端が解明された。原著論文作成中とあるが、報告された成果からすると本プロジェクト中に1報は成果が論文化されてもよかった。

(2)交流成果の評価について

南アフリカ側の研究代表者 Samie 博士と二名のスタッフが日本で研修を行い、相手国側スタッフの研究の質の向上を図る一方で日本側の3名が延べ約50日にわたり共同研究の調整を行うなど、日本側と相手国側の間で計画性に富んだ活発な研究交流がなされた。また、研究面のみならず臨床家の熱帯病研究への積極的なとりこみを図り、また基礎と臨床の橋渡しを試みた点も評価できる。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

質の高い感染症研究と豊富な臨床型を用いて具体的な成果を出し、研究者の交流も丁寧にしつかりと実現された。本事業の意図に合致しており、高く評価できる。